

穂別町より産出した長頸竜(HMG-1)  
(爬虫綱、広弓亜綱、鱗竜目、長頸竜亜目、プレシオサウルス上科、エラスモサウルス科)  
の『和名』について

仲谷 英夫\*

"Japanese Name" of the Plesiosaurian Fossil(HMG-1)  
(Class Reptilia, Subclass Euryapsida, Order Sauropterygia, Suborder Plesiosauria,  
Superfamily Plesiosauroidea, Family Elasmosauridae)  
from Hobetsu, Hokkaido, Northern Japan.

Hideo NAKAYA\*

## I はじめに

穂別町より産出した長頸竜 (HMG-1) (爬虫綱、広弓亜綱、鱗竜目、長頸竜亜目、プレシオサウルス上科、エラスモサウルス科) についての記載は現在、日本古生物学会報告・紀事に投稿中であるが、これが受理されれば日本における長頸竜についての初めての記載論文となる予定である。その詳細については投稿中でもあり、そちらを参照されたい (NAKAYA, in prep.)。

ここでは脊椎動物を記載する際の学名と和名の関係について少し述べ、長頸竜をはじめ生物がある種に属する、ということの意味について触れ、最後に穂別町から産出した長頸竜化石の『和名』(標本名) について考えてみたい。

## II 学名と和名

脊椎動物の化石が発見されるとよく新しい『和名』を付けて新聞等で発表される。しかしながら、これは生物学上意味を持つ和名ではない。生物学辞典 (山田他編、1983) では和名のことを『動植物の日本語での名を特に学名と対比する場合に和名とよぶ。』と明確に定義しており、学名についても『生物の群が決定された時、それを示すために与えられる名で、国際的な命名規約でその選択や形式は規定されている。』としている。なおラテン語化されて無味乾燥な記号のように思える学名の由来やその法則性は以外に面白いので GOTCH

---

1989年2月14日受理

\* 香川大学教育学部地学教室

Department of Earth Sciences, Kagawa University, Takamatsu, 760, Japan.

(1979)、小森(1983)などを読まれると、学名に対して今後一層、興味をもって接することができることと思う。

上述のように、和名は基本的に一つの生物種に付けられた学名に対応した日本語で表現された学術用語で(当然イギリスやフランスには英語やフランス語での呼び方もある)、これらと和名(英名、仏名)には特に先取権がなく、後から変更してもよい(文部省、日本動物学会; 1988では、従来の分類群に対する呼び名を好き勝手と言っていいほど変えている。例えば、奇蹄目のことをウマ目とするなど。これはかなり大きな問題を含んでいるように思える。)のだが、一応問題がない限り先に付けられたものが尊重されている。しかし特に日本産でない生物については混乱が見られ、これらを統一するために世界中の哺乳類(今泉、1988)や鳥類(内田、島崎、1987)の和名の辞典も出版されているくらいである。

さて、学名と和名の関係はこれで幾らか理解されたことと思うが、身近なもので例をあげてみると、『*Ursus arctos* LINNAEUS 1758』と呼ばれる動物の和名が『ヒグマ』である(今泉、1960)。そこで各地の動物園や教科書などでは同じ和名『ヒグマ』を使っている。もちろんこれ以外で呼んでいけないわけではなく、『山親父』と呼んでもいいのだが、これは和名ではなく、俗称か愛称にすぎない。

しかし、化石の場合『和名』と称されているものはそれに対応する学名があるのではなく、単なる標本に付けられた愛称か、いろいろな人が勝手に呼んでいる俗称にすぎない場合がほとんどである。特に中生代の爬虫類化石ではこのような例が多い。小島、長谷川(1976)は、中生代の日本産爬虫類化石に対して7つの『和名』をあげている(漢字混じりで書いてあり、正式には生物の種名は片仮名を使うという和名の原則からは外れている)。この当時、記載論文に書かれた学名に対応した和名はサハリンから産出した日本竜(*Nipponosaurus sachalinensis* NAGAO, 1936)と、稲井竜(*Metanothosaurus nipponicus* YABE & SHIKAMA, 1948)のみである。ただし、これらの種名(学名)が必ずしも現在適当であると考えられているわけではない(後述)。その後、歌津魚竜は記載された(*Utatusaurus hataii* SHIKAMA, KAMEI & MURATA, 1978)。

最近の爬虫類化石を取りあげた雑誌記事(辻、1989)でも、10近い恐竜の『和名』なるものをあげているが、これらも同様である。さすがに漢字混じりの『和名』は姿を消し、もっともらしい片仮名の『和名』が並んでいるが、それらは先にも述べたような現生の生物の和名とは似て非なるものである。

例えば、福井県勝山市から発見されたカツヤマリュウとキタダニリュウをみると、いずれも未記載であるし、新聞等での談話でも、属はおろか科についてもはっきりしたものではない。しかしこれらの名前は一人歩きし、恰も何か新しい動物が発見されたかのような印象を与えている。ちなみにカツヤマリュウは化石が産出した勝山市に由来した名称だが、キタダニリュウは発見された勝山市のある狭い地域に対する地名に由来している。このような名前の付け方を続けると、同じ地域からほかの爬虫類化石が発見されればさらに小さな沢の名前でも付けざるを得なくなるように思える。

### III 新種とは何か

また、新しい標本が必ず新種になるという幻想も未だに広く流布している。新しい標本でも以前に発見されたものと同じ分類群(種類)のこともあり、逆に博物館に長く眠っていた標本が全く未知の動物であったこともある。さらに発見された部位が不完全ならば、種はおろか属、科、目さえも分からないことがしばしばである。また断片的な標本しか従来、みつかっていなかったものでも、新しく重要な部位(頭骨など)が発見されて詳しい分類学的検討ができるようになることもある。

さらに、生物(古生物)の分類群を研究することは、単に新しい種を分類学上のリストに載せるのではなく、生物の分類群相互の系統関係を明らかにし(分岐関係のパターンの解明)、それらの生物地理上のパターンとの関係をも解明することを目的としている。古生物学会に投稿した徳別町産長頸竜化石の論文でもこれらのことについて触れるようにしている。

つまり重要なのは、ある新しい標本が新種であるということよりも、生物界の階層的な系統関係のどこに位置づけられるかということである。そこで表題の括弧内にある注(爬虫綱、広弓亜綱、鱗竜目、長頸竜亜目、プレシオサウルス上科、エラスモサウルス科)がこの標本の系統関係を考える場合重要になるのである。

生物界はより高次の階層から界、門、綱、目、科、属、種に大きく分けられており、例えばヒトは動物界(Kingdom Animalia)、脊索動物門(Phylum Chordata)又は脊椎動物門(Phylum Vertebrata)、哺乳綱(Class Mammalia)、霊長目(Order Primates)、ヒト科(Family Hominidae)、ヒト属(Genus *Homo*)、ヒト種(*Homo sapiens* LINNAEUS, 1758)に属することになる。種名であるヒトについてみると、*Homo*が属名で、*sapiens*が種小名でLINNAEUSが命名者(新種を記載した論文の著者名で発見者名が入ることはない。ただし発見者が記載論文の著者である場合は当然入る。)、1758が命名年(記載論文の発表年)である。特に種名の場合、*Homo sapiens*だけでいうことが多い。(詳しくはInternational Trust for Zoological Nomenclature, 1985や日本学術会議動物命名法小委員会訳、1966を参照されたい。)

さらに、これらの分類群をさらに細かく分ける場合、より低次に向かっては亜(Sub-)、下(Infra-)を、高次へは上(Super-)又は超を付けて細分する。ちなみに長頸竜は広弓亜綱の中の一つの亜目を指しており、双弓亜綱に属する恐竜とは大変、高次の分類群から違っており、亜綱が違うということは同じ爬虫類でもワニとカメ程違うことになる。即ち、長頸竜のことを『海にすむ恐竜』というのは、カメのことを『甲羅を持ったワニ』というほどおかしいことである。

よく化石の新種を発表しても、新しい標本が所属する属はおろか科の特徴についても、はっきりとは触れられていないことがある。いくら他の標本とは違うところがあると言っても、それは単なる個体変異(年齢による変異、雌雄差による変異、遺伝的な変異)の場合もあるかもしれない。またその標本がより高次の段階の所属が不明確ならば、実は比較している標本群と新しい標本は属が違っているのかもしれない、さらに科が違っているために異なって見えるだけなのかもしれない。このように不十分な検討の結果、作られた新種は

無意味であり、いくら新しい学名がついていても、その学名は単に標本に対する呼び名以上のものではない。

そのような研究に対して、新しい種の記載がなくとも、ある分類群内の姉妹種間の分岐関係やその姉妹種群が共通の祖先種からどのような派生形質を新たに獲得して分岐してきたかを解明できれば生物進化の研究にとって大きな貢献をしたと言えるであろう。

#### IV 穂別町産出の長頸竜の場合

さて従来報告（仲谷、1985）で1975年に荒木新太郎氏が発見した標本に関する情報をもとに穂別町教育委員会が1977年に発掘した長頸竜化石（HMG-1）の『和名（標本名）』をホベツクヒナガリュウとしたが、これに発見者の名前が入っていないとの指摘があった。先に述べたようにこの名称は学名の日本語訳としての和名ではないため、単なる標本に対する呼び名と考えたほうがいいことは言うまでもない。しかし、標本が世の中に現れるためには発見者の果たす役割は非常に大きく標本名に発見者名を入れるのは非常に重要なことである。

しかし、この報告では1975年に発見された標本については未検討であり（報告を書いた当時、この標本はクリーニングされておらず、博物館にも所蔵されていなかったため、その後クリーニングされ、この標本を検討できる可能性も少なかった）、論文の冒頭で発見者名には触れたが、標本の呼び名からは抜けることとなってしまった。その理由としては、1975年に発見された標本に発見者名を入れた名称をつけることがもっとも妥当であると考えたためである。

なぜこの標本に1977年に発掘された標本とおなじ名称を使うことを躊躇せざるを得ないかと言うと、まずこれら二つの標本が同一の分類群に属するもの（同じ種類）であるかどうか不明なためである。また、『和名』を標本名と考えた場合でも、1975年標本と1977年標本の間の産出地点や産出層準の関係が不明であるため、同一の名称をつけるべきかどうかは議論のあるところである。

しかしながら、1977年標本の名称を変更することは前にも述べたように可能であるので、ここでは発見者に敬意を表してホベツアラキリュウとしたい。この場合1975年標本については先に述べた理由で、今後十分な研究が終わるまで1977年標本と同じ名称で呼ぶべきかどうかについては留保する。

#### V おわりに

以上見てきたように特に脊椎動物の化石で『和名』と呼ばれているものは従来非常に誤解されてきた。このような『和名』は何か新しい動物の名前であったのではなく、ほとんどが単なる標本に対する名称で、よくいえば愛称のようなものであることがお分かりいただけたことと思う。

中生代の爬虫類に限って言えば現在の日本から産出したもののうちで、種としての特徴を明示し、記載した論文中で新種とされたもの（外国語で報告されなければ正式ではないというのは間違いで、ただ日本語の論文の場合、外国の研究者に読まれる機会が少なくな

るというだけである。)は、宮城県津山町産の *Metanothosaurus nipponicus* YABE & SHIKAMA, 1984 (ただし、著者の一人、鹿間は後にこれが偽竜類ではなく魚竜類の可能性を示唆している; 鹿間時夫論文選集刊行会、1978)、宮城県歌津町産の *Ulatusaurus hataii* SHIKAMA, KAMEI & MURATA, 1978 と北海道穂別町産 *Mosasaurus hobetsuensis* SUZUKI, 1985 の三つにすぎない。この事実は特に強調しておく必要があると思われる。

また、爬虫類化石の記載論文(最近では AOKI, 1983; 平山・鈴木, 1985 など)自体も極めて少なく、産出報告で留まっている標本(小島ほか、1970、1927 など)も多い。さらに新聞などで発表された後はどうなっているのか全く不明の標本は数多い。

現在、多くの若手研究者が爬虫類化石の研究に携わっているが、皆一様に、自由に研究できる標本を確保するのに苦勞している。彼らにこれら死蔵されている標本を研究する機会を作るのが各地の博物館や多くの標本を所蔵している研究者の務めではなからうか。

#### 引用文献

- AOKI, R. (1983) New Generic Allocation of *Tomistoma machikanense*, A Fossil Crocodylian from the Pleistocene of Japan. *Copeia*, 1983(1), 89-95.
- GOTCH, A. F. (1979) *Mammals — Their Latin Names Explained — A Guide to Animal Classification*. Blandford, Poole(Dorset, U. K.)
- 平山廉・鈴木茂 (1958) 北海道穂別町の函淵層群産白亜紀ウミガメ化石について(予報)。穂別町立博物館研究報告、2、17-30、3pls。
- 今泉吉典 (1960) 原色日本哺乳類図鑑。保育社、東京。
- 今泉吉典監修 (1988) 世界哺乳類和名辞典。平凡社、東京。
- International Trust for Zoological Nomenclature (1985) *International Code of Zoological Nomenclature (3rd. ed.)*. University of California Press, Berkeley & Los Angeles.
- 日本学術会議・動物命名法小委員会訳 (1966) 国際動物命名規約 (*International Code of Zoological Nomenclature*, 1961の邦訳)。北隆館、東京。
- 小森厚 (1983) どうぶつ学名散策。東京書籍、東京。
- 文部省・日本動物学会 (1988) 学術用語集 動物学編(増訂版)。丸善、東京。
- NAGAO, T. (1936) *Nipponosaurus sachlinensis* A new genus and species of Trachodont Dinosaur from Japanese Saghalien. *Journal of the Faculty of Science, Hokkaido Imperial University*, Ser. IV, 3(2), 185-220, pl. 11-22.
- 仲谷英夫 (1985) 北海道穂別町より産出した長頸竜化石(HMG-1)について(予報)。穂別町立博物館研究報告、2、43-50。
- NAKAYA, H. (in prep.) Upper Cretaceous Elasmosaurid (Reptilia Plesiosauria) from Hobetsu, Hokkaido, Northern Japan.
- 小島郁生・長谷川善和・鈴木直 (1970) 白亜系双葉層群より首長竜の発見。地質学雑誌、76(3)、161-164。
- 小島郁生・長谷川善和・大塚裕之 (1972) 北海道の白亜系産爬虫類化石。国立科学博物館専報、5、213-222、pl. 5。

- 小島郁生・長谷川善和 (1976) 日本にいた竜の仲間たち。国土と教育、36、10-13。
- SHIKAMA, T., KAMEI, T. & MURATA, M. (1978) Early Triassic Ichyosaurus, *Utatsusaurus hataii* gen. et sp. nov., from the Kitakami Massif, Northeast Japan. *Science Report of Tohoku University, 2nd. Ser. (Geology)*, 48(2), 77-97, 9pls.
- 鹿間時夫論文選集刊行会 (1978) 鹿間時夫論文選集。鹿間時夫論文選集刊行会、横浜。
- 鈴木茂 (1985) 北海道穂別町の上白亜系函淵層群産海棲トカゲ *Mosasaurus* の一新種。海棲脊椎動物の進化と適応、地学団体研究会専報、30、45-66。
- 辻篤子 (1989) 資源発掘 日本の恐竜。アエラ (*Asahi Shinbun Weekly AERA*), 1989、(1/17)、38-41、朝日新聞社、東京。
- 内田清一郎・島崎三郎 (1987) 鳥類学名辞典。東京大学出版会、東京。
- YABE, H. & SHIKAMA, T. (1948) A New Lower Triassic Nothsauria from Isihu near Yanaizu, Mono-gun, Miyagi Prefecture. *Proceedings of the Japan Academy*, 24(10), 35-41.
- 山田常雄・前川文夫・江上不二夫・八杉竜一・小関治男・古谷雅樹・日高敏隆編集 (1983) 岩波生物学辞典 (第3版)。岩波書店、東京。